歴史総合-DX

 **1995年①（平成7）阪神淡路大震災・オウム真理教事件**

1995年（平成7）1月17日まだ夜の明けやらない午前5時46分に兵庫県の淡路島を震源とする大地震が発生した。神戸市などでM7.2（最大震度は7）の大地震は20秒近くの大きな揺れが襲い、神戸気象台の地震計測器が激震で壊れる程の大地震で、約10万5000棟の家屋が全壊、死者は6400人以上、被害総額は10兆円近くに上った。関西地方では過去の大地震は稀だったこともあり、政府の初動は遅れた。被災地ではまだ余震が続く3月に、今度は首都東京の官庁街・霞が関周辺を狙ったカルト宗教のオウム真理教が、地下鉄車両内に猛毒のサリンを発生させ、12人の死者、5500人を超す重軽傷者を出した事件（地下鉄サリン事件）が起こった。オウム真理教は、富士山を望む山梨県上九一色村 （当時、かみくいしきむら）に「サティアン」と呼ばれる教団の主要施設を構え、親族から連絡を絶ち切った若い信者が尊師とあがめる麻原彰晃（しょうこう）やその取り巻きの偽りの教義を信奉していた。前年6月には長野県松本市で猛毒のサリンを撒き、7人が死亡、約60人が入院し、 事件の第一発見者が冤罪報道で疑われた「松本サリン事件」を起こしていた。サリンを製造するサティアン に対し警察庁の強制捜査が行われたが、その3月末には、警察庁長官が銃撃される事件も発生し、1995年（平成7）は、今までにない悲惨な年となったが、また、震災後1年間で全国から約138万人のボランティアが被災地に駆けつけて「ボランティア元年」と呼ばれるようになった年でもあった。この年、官庁街の霞が関を襲撃された政府は、危機管理体制を強化し、翌1996年 （平成8）には首相官邸に24時間体制で災害・緊急情報等の情報収集を行い、緊急時の初動対応を行う「危機管理センター」が開設されることとなり、また、オウム関連の一連の事件資料は「刑事参考記録」として永年保存（アーカイブ）されることとなった。